

小さい太郎の悲しみ

新美南吉

青空文庫

一

お花畑から、大きな虫がいつぴき、ぶうんと空にのぼりはじめました。からだが重いのか、ゆつくりのぼりはじめました。

地面から一メートルぐらいのぼると、横にとびはじめました。

やはり、からだが重いので、ゆつくりいきます。うまやの角の方へのろのろとゆきます。みていた小さい太郎は、縁側えんがわからとびおりました。そしてはだしのまま、篩ふるいをもって追っかけてゆきました。

うまやの角をすぎて、お花畑から、麦畑へあがる、草の土堤どての上で、虫をふせました。とつてみるとかぶと虫でした。

「ああ、かぶと虫だ。かぶと虫をとつた」

と小さい太郎はいいました。けれどだれもなんともこたえませんでした。小さい太郎は兄弟がなくてひとりぼっちだったからです。ひとりぼっちということはこんなときたいへんつまらないと思います。

小さい太郎は縁側にもどつてきました。そしておばあさんに、

「おばあさん、かぶと虫をとつた」

とみせました。

縁側にすわつていねむりしていたおばあさんは、眼をあいてかぶと虫をみると、

「なんだ、がにかや」

といつて、まためをとじてしまいました。

「ちがう、かぶとむしだ」

と小さい太郎は口をとがらしていいましたが、おばあさんには、かぶと虫だろうが蟹だろうが、かまわないらしく、ふんふん、むにやむにやといつて、ふたたび眼をひらこうとしました。

小さい太郎は、おばあさんの膝から糸ぎれをとつて、かぶと虫のうしろの足をしばらくしました。そして縁板の上を歩かせました。

かぶと虫は牛のようによちよちと歩きました。小さい太郎が糸のはしをおさえると、まえへ進めなくて、カリカリと縁板をかきました。

しばらくそんなことをしていましたが、小さい太郎はつまらなくなってきました。きつ

と、かぶと虫にはおもしろい遊び方があるのです。だれか、きっとそれを知っているのです。

二

そこで小さい太郎は、大頭に麦わら帽子をかぶり、かぶと虫を糸のはしにぶらさげて、かどぐちを出てゆきました。

ひるはたいそうしずかで、どこかでむしろをはたく音がしているだけでした。

小さい太郎は、いちばんはじめに、いちばん近くの、桑畑くわばたけの中の金平ちゃんの家へゆきました。金平ちゃんの家には七面鳥を二羽わかっついていて、どうかすると、庭に出してあることがありました。小さい太郎はそれがこわいので、庭まではいつてゆかないで、いけがきのこちらからなかをのぞきながら、

「金平ちゃん、金平ちゃん」

と小さい声でよびました。金平ちゃんにだけ聞こえればよかったからです。七面鳥にまで聞こえなくてもよかったからです。

なかなか金平ちゃんに聞こえないので、小さい太郎はなんどもくりかえしてよばねばなりませんでした。

そのうちに、とうとううちの中から、

「金^{きん}平^{ぺい}はの才」

と返事がしてきました。金平ちゃんのお父さんのねむそうな声でした。「金平は、よんべから腹^{はら}がいうての才、ねておるだで、今日^{きょう}はいっしょに遊べんぜエ」

「ふうん」

と聞こえないくらいかすかに鼻の中でいつて、小さい太郎^{たろう}はいけがきをはなれました。

ちよつとがっかりしました。

でも、またあしたになつて、金平ちゃんのお腹^{なか}がなおれば、いっしょに遊べるからいいと思いました。

三

こんどは小さい太郎は一つ年上の恭^{きょう}一^{いち}君^{くん}の家にゆくことにしました。

恭一君の家は小さい百姓家^{ひやくしやうや}でしたが、まわりに、松や椿^{つばき}や柿^{かき}や橡^{とち}などいろんな木が
 いっぱいありました。恭一君は木登りがじょうずでよくその木にのぼっていて、うかうか
 と知らずに下を通ったりすると、椿の実を頭の上に落としてよこして、おどろかすことが
 ありました。また木にのぼっていないときでも恭一君はよく、もののかげや、うしろから、
 わつといつてびつくりさせるのでした。ですから小さい太郎は、恭一君の家の近くにくる
 と、もう油断^{ゆだん}ができませんのです。上下左右、うしろにまで気をつけながら、そろりそろり
 とすすんでゆきます。

ところがきょうは、どの木にも恭一君^{きやういちくん}はのぼっていません。どこからも、わつとい
 つてあらわれてきません。

「恭一はな」と、鶏^{にわとり}に餌^{えさ}をやりに出てきたおばさんが、きかしてくれました。「ちよつと
 わけがあつてな、三河^{みかわ}の親類^{きんるい}へ昨日^{きのう}、あずけただがな」

「ふウン」

と小さい太郎^{たろう}は聞こえるか聞こえないくらいに鼻の中でした。なんとということでしょう！
 なかのよかつた恭一君が、海の向こうの三河のある村にもらわれていつてしまつ
 たということです。

「そいで、もう、もどつてきやしん？」

と、せきこんで小さい太郎はききました。

「そや、また、いつかくるだらあずに」

「いつ？」

「盆ぼんや正月にやくるだらあずにな」

「ほんとだね、おばさん、盆と正月にやもどつてくるね」

小さい太郎はのぞみを失いませんでした。盆にはまた恭一君と遊べるのです。正月にも。

四

かぶと虫を持った小さい太郎たろうは、こんどは細い坂道をのぼって大きい通りの方へ出てゆきました。

車大工さんの家は大きい通りにそつてありました。その家の安雄やすおさんは、もう青年学校にいつているような大きい人です。けれどいつも小さい太郎たちのよい友だちでした。陣じんとりをするときでも、かくれんぼをするときでもいっしょに遊ぶのです。安雄さんは小

さい友だちからとくべつにそんなけいされていました。それは、どんな木の葉、草の葉でも、安雄さんの手でくるくるとまかれ、安雄さんのくちびるにあてると、ぴいと鳴ることができたからです。また安雄さんはどんなつまらないものでも、ちよつと細工をして、おもしろいおもちゃにすることができたからです。

車大工さんの家に近づくにつれて、小さい太郎の胸^{むね}は、わくわくしてきました。安雄さんがかぶと虫で、どんなおもしろいことを考え出してくれるか、と思つたからです。

ちようど、小さい太郎のあごのところまである格子^{こうし}に、くびだけのせて、仕事場の中をのぞくと、安雄さんはおりました。おじさんとふたりで、仕事場のすみの砥石^{といし}でかんなの刃^はをといでいました。よくみるときようは、ちゃんと仕事着をきて、黒い前だれをかけています。

「そういうふうに入力るんじやねえといったら、わからん奴^{やつ}だな」
とおじさんがぶつくさいいました。安雄^{やすお}さんは刃^はのとき方をおじさんに教わっているらしいのです。顔をまっかにして一生けんめいにやっています。それで、小さい太郎^{たろう}の方をいつまで待ってもみてくれません。

とうとう小さい太郎はしびれをきらして、

「安さん、安さん」

と小さい声でよびました。安雄さんにだけ聞こえればよかったのです。

しかし、こんなせまいところではそういうわけにはいきません。おじさんがききとがめました。おじさんは、いつも子どもにむだ口なんかきいてくれるいい人ですが、きようは、何かほかのことで腹^{はら}を立てていたとみえて、太い眉根^{まゆね}をびくびくと動かしながら、

「うちの安雄はな、もう今日^{きよう}から、一人前^{いちにんまえ}のおとなになったでな、子どもとは遊ばんな、子どもは子どもと遊ぶがええぞや」

と、つつばなすようにいいました。

すると安雄さんが小さい太郎の方をみて、しかたないように、かすかに笑いました。そしてまたすぐ、じぶんの手先に熱心な眼^めをむけました。

虫が枝から落ちるように、力なく小さい太郎は格子^{こうし}からはなれました。

そしてぶらぶらと歩いてゆきました。

五

小さい太郎たろうの胸むねにふかい悲しみがわきあがりました。

安雄さんやすおはもう小さい太郎のそばに帰ってはこないのです。もういっしょに遊ぶことはないのです。お腹なかがいたいなら明日あしたになればなおるでしょう。三河みかわにもらわれていつたつて、いつかまた帰ってくることもあるでしょう。しかしおとなの世界にはいった人がもう子どもの世界に帰ってくることはないのです。

安雄さんは遠くにいきはしません。同じ村の、じき近くにいます。しかし、きょうから、安雄さんと小さい太郎はべつの世界にいるのです。いっしょに遊ぶことはないのです。

もう、ここにはなんにもものぞみがのこされていませんでした。小さい太郎の胸には悲しみが空のようにひろくふかくうつろにひろがりました。

ある悲しみはなくなることができます。ないて消すことができます。

しかしある悲しみはなくなできません。ないたつて、どうしたつて消すことはできないのです。いま、小さい太郎の胸にひろがった悲しみはなくなることのできない悲しみでした。

そこで小さい太郎は、西の山の上に一つきり、ぽかんとある、ふちの赤い雲を、まぶしいものをみるように、眉まゆをすこししかめながら長いあいだみているだけでした。かぶと虫

がいつか指からすりぬけて、にげてしまったのにも気づかないで――

青空文庫情報

底本：「新美南吉童話集 2 おじいさんのランプ」大日本図書

1982（昭和57）年3月31日初版第1刷発行

1996（平成8）年2月15日初版第2刷発行

※表題は底本では、「小さい太郎《たろう》の悲しみ」となっています。

※誤植を疑った箇所を、「牛をつないだ椿の木」大和書店、1943（昭和18）年9月発行の表記にそって、あらためました。

入力：江村秀之

校正：諸富千英子

2018年2月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

小さい太郎の悲しみ

新美南吉

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>